
A book worm

松本 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A book worm

【Zコード】

N1679C

【作者名】

松本 和

【あらすじ】

本が好きで、いつも本の中の世界にのめり込んでしまう私。そんな私が今回手にしたのは、鬱病患者が主人公の本だった。

第1話

みんなにも経験があることだと思つたが、私がきっと一番だと思つ。

本を読むと自分もその世界に入り込んだかのような錯覚に陥る。面白ければ面白いほど、深くリアルな世界へと引きずり込まれる。

…私は誰よりも、その架空の世界に入り込みやすかつたのだ。

私は小さい頃から本がすきだった。book worm。よくそう呼ばれていた。

その日、私は高校の図書室で一冊の本を手に取った。題名は『A mental illness』つまり『精神病』という意味だ。

私はページをパラパラとめくつてみた。どうやら、一人の精神病患者とその治療にあたつた医師の話らしい。

そこまで厚いものでもないし、今までに読んだことのないジャンルのものだったので、私はそれをかりることにした。

家に帰つてさつそくその本を読んでみた。予想通り、その話の内容は少し難しかつたが、私はいつものようにその本の世界に引きずり込まれた。

私は本の中で、精神病患者のポジションにいた。この本は、まず普通の生活を行っていた頃の患者の話から始まつた。私も本の中で患者と同じ生活をしていた。

その患者は男性で、最初はみんなと同じように会社に行って働いていた。有能で期待もされていた。明るい性格で同僚に好かれていた。しかし、そんな彼がしだいに鬱状態になつていく。

その理由は上司のいびりだつた。やたらと仕事にいやもんをつけたり、雑用はすべて彼にやらせたりと、なかなかにひどいものだつた。

はじめは怒られたら落ち込む程度だつた。それがしだいに悪化し、ふさぎこむようになり鬱状態となつた。

しばらくして、彼は仕事を辞めた。それも悪かつた。彼は自分の無力さ、期待を果たせなかつたことへのうしろめたさからどんどんと悪い方向へ進んでいった。

それで、彼は友人の勧めもあり精神科へ通うこととなつたのだ。

「夕飯よーー降りてきなさいーー」母が呼ぶ声で、私は本の中から引き戻された。

続きをが気になつたが仕方がなかつた。『飯を食べてすぐ読むことにした。

『飯を食べている間（本を読んでもいい）いつもこんなものなのだが

…）私は読み途中の本の中の患者のよつにふさぎ込んでいた。

母に呼びうかしたのか。と尋ねられたがいちいち説明するのも面倒だったので、なんでもないのだと返事をした。

急いでご飯を食べて、私は再び本を手に取った。
早く続きを読みたかった。

「あなたは躁鬱病ですね。」

「躁鬱病…ですか？」

彼は聞き慣れない病名を医師に聞き返した。

「あなたの場合は心理的負担が原因でしょう。」

…躁鬱病…というよりも双極性障害…という呼び方の方がが多いですが、
気分が高まつたり、沈んだりと両方をもつ気分障害のことです。

治療は薬物治療・心理治療です。薬物とは気分安定薬ですね。」

医師は一気に話し終えると今日渡す分の薬の説明をしだした。

薬を受け取つて彼は家に帰つた。一人暮らしなので待つものなどい
なかつた。今日のことを親に話すべきか悩んでいた。自分が鬱病だ
ということだが、恥ずかしくて仕方がなかつた。

……気が付けばもう夜の1-2時回っていた。寝なければ明日苦労するだろう。私は本を閉じて寝ることにした。

しかし先程の彼の悩みが、まるで自分の悩みのよひに頭の中でもぐついて、なかなか寝付けなかつた。

朝おきて、学校に行きたくないと思つてゐる自分がいた。
やる氣がでなくて、布団の中でうずくまつていた。
何もしたくないと、しなくてもいいと考えていた。

ふと、枕元にある本に氣付いた。… そつか。私はまた本の中の人物の心情を引きずつてしまつっていたのか。

「…」いやつとその「…」とに氣付く。すると少しある氣がでてきた。いつものことだった。本の中の彼のようふをせ込んでいたのだ。

それがわかつた私はのろのろと学校へ行くための支度をはじめた。ただ、完璧に彼から抜け出すことはできなかつた。

そのため学校でも、やる氣がでなく、元氣がないと何度も言われた。私もうんざりしていた。早くこの状態から抜け出したい。

そのためには、彼が元氣にならなければならぬ。

つまり、早く本を読まなくてはいけないのだ。彼の病氣が治れば私のこの氣分も晴れ晴れとするだろ。

授業と授業の間にやえ本を読む「…」に撤した。もちろん休みもだ
…。

お母さんは話さない。一晩中悩んで、彼はその結論にいたつた。会社もやめてそのうえ鬱病だなんて、自分を応援してくれている母に言つことなどできなかつた。

結果、彼は一人で鬱と戦うことになつた。病院に通い、薬を飲み、部屋でじつとしている。カウンセリングを受けて、軽い運動をして、ボーッと一日を過ぎます。

何もすることができない。したいこともない。笑うことも、話すことも、遊ぶこともなく一日一日は過ぎ去つていいくのだ。

しかし、それが悪いといつ意識がないので、病気は治るどころか日に日に悪化していくのだ。

ふいにページをめくる手をとめた。

寒気がした。……もしも、もしも彼がこのまま病気が治らないままだとしたら?……最悪の場合、死んでしまうとしたら?私はどうなるのだろうか。

そんなこと今までに考えたこともなかつた。主人公が死ぬといつ本に出会つたことはない。

どうなるかわからぬ。

…こわい。こわい。読みたくない。彼は死ぬかもしれない。死ぬかもしれない。

死なないかもしれない。その可能性だつてある。彼が死ぬとはどこにも書いてなかつた。まだ希望はあるのだ。彼が治れば私もいまのすつきりしない状態から抜け出せる。

大丈夫。死ぬはずはない。

私は一刻も早くこの本を読みおわりたかつた。そうして次は明るい話を読んで、こんな話はすぐに忘れててしまえばいい……。

第3話

「すみません。…今日も行けません。明日は、明日は行きますから。」

受話器を持つ彼の手はひどく震えていた。

「そう言って昨日も来なかつたじゃないですか。」

病院の受け付けの言葉をさえぎり、電話をきつた。

ついに、病院に行くのさえままならない。彼は大きくため息をつき、布団に寝転がつた。

昨日と…いや、もう一週間近くこんな生活が続いているようだ。医師の話では一ヶ月彼は病院に来なかつたとある。

9

もちろん患者が病院に来なかつた間のことなんて『彼』以外詳しいことはわからないのだ。

そのため、話は一ヶ月後に飛んでいた。

――一ヶ月後。

患者さんがやつと病院に訪れた。医師はびっくりして彼が病院に来なかつたのか、理由を尋ねた。

「お久しぶりですね。…どうしてたんですか?」

「ずっと、『家にいました。』

「ずっと…ですか？」

「必要なとき以外は…。」医師は腕を組んで考える素振りをみせる。
「今日はどうして来ようと思つたんですか？」

「…なんとな〜く。たまには、いいかな…と。懲も懲もていた
んで。」

薬がきれていなければ、彼は今日ここにきていなかつただろ。も
う自分でまじり混じつもなくて、自分に鞭打ちながらここまで来た
のだ。

「薬ですね。出しども。…最近はどうですか？何か変わつたこ
とはありますか？」

「いえ。何も。何も変わりません。こつもと同じです。変わら
ず…
平凡で。それで。」

「…今まで言つて彼は黙り込んだ。医師はそのことを深く追求せず、
やつですか。それはよかつた。と言つて診察を終えた。

このとおり。医師は診察をしていて感じた不安を診察書に書き留めて
いた。

彼は今危ない状態。精神が非常に不安定で、何も変わりのない平凡

な毎日を生きることに、不満を感じているかも知れない。

……と。

この医師の判断で、彼は薬をもうひとつきて、「明日また病院に来てカウンセリングを受けてください。」と言われた。

また明日も病院に来なければならぬ。それは彼にとって面倒なことこの上なかつた。

.....。

死ぬはずがない。そう信じて読んでいたけれど、彼は医師に危険な状態にあると言われている。

このまま死んでしまうのか?... 続きが気になり、私はまた本の中の世界に入り込んだ。

医者にはまた来るよつて言われたが、彼は次の日病院に行かなかつたらしー。

まだまだつづきそつうな雰囲気のまま物語は次の章に突入した。

「その後、彼は一度も病院にこなかつたんですよ。」…とそのセリフから新しい章は始まつた。

私はいきなりの展開に驚きを隠せなかつた。その一言は、彼が死んだことを表していたからだ。

どうやら彼の担当だつた医者と他の医者との会話がじー。

「よくあるパターンですね。」医者なのだから、もつ慣れたものなのだろー。

「いつ……なくなつたんですか？」それでもよくあるパターンだからこりしりたかつたようだ。

「久しぶりに病院に来てから、一週間後ですよ。ちゃんと病院に来てくれればよかつたのに。」

「まあ……それすら困難だつたんでしょう。」
それからじーぱらぐく二人の会話はつづいていくべく…そして…。

「彼を発見したのは、連絡がつかなかつたから様子を見にきた母親だつたらしい。電話に出なかつたから不安になつたそつだ。

家族だから合鍵を持つていたんだね。インターホンをくぐり鳴らしても出ないから、勝手に入つたんだ。

そしたら……リビングに彼がいたらしい。首をつるでもなく、リストカットをするでもなく……ただ座つていた。だから最初は死んでいるなんて思いもしなかつたそつだ。

近づいてよく見てみると、彼は呼吸をしていなかつたし……もうかなり腐つていたらしいんだ。

死んだのは一ヵ月前だつたつて話だ。」

部屋のドアがノックされている。きつとお母さんだ。それはどんどん強くなる。私の名前を呼んでいる。

返事をしなくちゃ。こねよ。どうしたの？ なんでそんなに慌てるの？……なんでドアを壊さうとしているの？

私の声が聞こえてないの？お母さん……ほり、わかつたでしょ？私生きてるでしょ？ 座つてただけじゃない。

そんな悲しそうな顔をしないで……泣かないで！

私はまた生きてるでしょ？

お母さんの叫び声が聞こえる。どうやら私の声は聞こえていないらしき。

…… そうか。私は死んでしまったんだ。精神がおかしくなつてしまつたんだ。そう…… ちょうど、彼のよつこ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679c/>

A book worm

2010年10月14日16時58分発行